



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ロシアにおける考古学の形成（1）： ミューラーとロシアで最初の『考古学調査手引書』
Author(s)	加藤, 博文
Citation	北方人文研究, 1, 87-103
Issue Date	2008-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/34542
Type	departmental bulletin paper
File Information	KAT0.pdf



〈研究ノート〉

ロシアにおける考古学の形成(1)

—— ミューラーとロシアで最初の『考古学調査手引書』——

加 藤 博 文

北海道大学大学院文学研究科

はじめに

周知のごとく、ヨーロッパにおける古代への関心は、18世紀の半ばまで長らく単に古美術に対する関心の延長線上にあった。王室や教会、貴族層の個人コレクションとして収集されたそれらの古美術品を評価し、位置づけを研究する中で考古学は、学問としての体裁をなしてきたという歴史を有している。しかし、18世紀も後半になると資料を古典美術考古学として体系化し、学術的な枠組みを構築し始める動きが生じるようになる。このような動きを受けて大学においても考古学と美術史が講じられるようになる。またほぼ同時期に自然科学との関わりから、人類の歴史についても掘り下げも進められるようになり、過去への関心は広く様々な階層の人々の関心となってくるのである。

しかし、考古学が近代科学としての装いを呈するまでの過程は、一つの流れに括れるほど単純ではない。近代国家における考古学には、国民国家のアイデンティティを形成するための装置、国民の歴史の共有を図る装置としての役割があった。そこには各国ごとの近代化と取り巻く状況と極めて強く関係した政治的意図が働いていること忘れるべきではない。

本論の目的は、ヨーロッパの中で最も東方に位置するロシアを取り上げ、考古学が近代科学として形成される過程を学史的に検討することにある。当然、その長い歴史を本論のみで描くことは不可能である。本論は、この歴史の初期のみを扱うものである。

ロシアにおける学問の近代化の過程は、西欧の知の体系の受容とほぼ同義である。とりわけ重要な点は、ロシアにおける近代知の導入がドイツを中心とした海外の研究者を招へいすることでその基礎が形成され、研究が開始された点にある。そのため考古学に限らずロシアにおける諸科学の基礎は、外国人研究者によって地ならしされたという特質を有する。この傾向は、近代化における後進国に共通する特徴でもある。

以下においては、ドイツから招へいされたミューラー (G. F. Müller: Г. Ф. Миллер 1705–1783) の残したロシアで最初の考古学調査手引書 (Инструкция Миллера) を紹介するとともに、ロシアにおける黎明期の考古学と海外から招へいされた研究者の果たした役割を検討したい。

ロシア考古学におけるミューラーの果たした功績については、その評価が幾度か変遷してきている。革命以前には、その功績が高く評価されていた。しかし、10月革命以降の社会主義政権下の1940年から50年代にかけては、18世紀のロシアにおける近代化を「コスモポリタリズムと西洋科学への

追従」と否定的に評価する「闘争」の中でミュラーの功績も反ロシア主義的と位置付けられ、1990年代まで十分に評価されてこなかった。その評価は単に18世紀の探検家としてであったり、初期の発掘を行った研究者として留まるものであった。

ミュラーたちドイツから招へいされた研究者達は、当時開拓が始まったばかりのロシアの東方植民地であるシベリアでの学術探検（調査）を行うことで、ロシア帝国の版図の整備を進め、また様々な学術情報を首都へともたした。得られた資料は、各研究機関や博物館の基礎資料を形作る。このように芽が捲かれた近代科学とその中における人材育成は、やがてヨーロッパ地域の中で自らのロシア民族としてのアイデンティティを覚醒させる上で大きな役割を果たしていった。

後にこのロシアという国家が、世界で初めての社会主義国として、また多民族国家として独自の考古学や人類学的知識を形成していく時、彼らが旅したシベリアは、再び重要なフィールドとなり、諸民族を巻き込んだ議論の舞台となるのである。

1. 18世紀のロシアにおけるピョートル大帝による西欧化と学術探検

ロシアで最初の組織的な考古学調査は、ピョートル大帝の治世下で派遣されたシベリアへの「学術旅行（探検）：Ученые путешествия」が最初のものである。

本来この学術探検は、考古学的調査を主たる目的としたものではない。植物、動物学、鉱物学、地理学、民族誌学、測地学、天文学に関するあらゆる資料を収集し、新たな植民地シベリアに関する詳細な情報を集めることにその本来の目的があった。

1718年2月18日（旧暦）にピョートル大帝の布告とともに全国から収集される希少かつ珍奇な品々を収蔵するロシアで最初の博物館施設であるクンストカメラ¹⁾が設立される。また1724年には、学術研究教育機関として帝立サンクト・ペテルブルク科学アカデミーおよびアカデミー大学とギムナジウムが創設されている（Формозов 1974: 6）。

当時のロシアにおいては、近代国家として国家の周縁の情報の収集、領域の確定、領土内の自然環境や資源の調査、住民（民族）の構成と人口に関する基礎データの収集が求められており、この目的に従って地理学的な調査旅行が組織された。そのような初期の学術探検として著名なものには、1707年から1727年の7年にわたったメッサーシュミット（Д. Г. Мессершмидт）によるシベリア探検、また1733年から1743年に実施された大シベリア探検隊に参加したミュラーらによる学術探検が知られている。この学術探検は、ロシアにおける考古学の成立を考える上において重要である。メッサーシュミットによるアバカンでのクルガン（古墳）の発掘調査や、ミュラーによってウスチ・カーメンノゴルスクでクルガンが調査されているが、これは初期の組織的なクルガンの発掘事例として学史的にも引用されてきた。

これらの学術探検がなされる以前のシベリアについての知識は、16世紀以降にシベリアに進出し

1) 当初、クンストカメラ（Кунсткамера）の基礎は、ピョートル大帝の個人コレクションを主体としていた。1714年に首都をモスクワからペテルブルクへ遷都する際に図書館と合わせて創設された。最初は非公開であったが1719年以降スモリヌィ修道院近くへ移転する際に、公開を前提とした公共博物館となった。ワシリエフスキー島に建物が完成したのは、1727年である。同様の名称のクンストカメラとしては、17世紀にデンマークのコペンハーゲンにフリードリッヒ3世によって創設されたものが知られている。現在は「ロシア科学アカデミーピョートル大帝記念人類学・民族誌学博物館」となっている。

たコサックによる記録がわずかに知られるのみであった。1567年、コサックのアタマンであるペトロフ（И. Петров）がイワン4世の命により、同じくコサックのヤリチェフ（Бурнаш-Ялычев）と共にウラルを超えてモンゴルを経由して北京に至っている。彼らの残したバイカルから朝鮮までの記録は、ロシア人による最初のシベリア探検記録となった。

1581年にはエルマーク（Т. Ермак）がシビル汗国へ侵入し、ロシア帝国によるシベリアの征服と植民地化が本格化することとなる。毛皮を求めてウラル山脈を越えて東進する征服集団は、1604年にはトムスクを建設、1615年にエニセイスク、1628年にクラスノヤルスクを建設し植民活動が進められていく。1632年にはヤクーツクが建設され、以後の太平洋岸への植民活動の拠点となる。

しかし、それらによってもたらされる情報は組織的なものではなく、断片的であり、場当たり的なものと言えた。それらと18世紀に行われた学術探検との大きな違いは、後者が研究者によって組織され明確な目的をもった調査であったこと、そしてその中で次世代の研究者が育成されたことである。

以下では当時の学術調査の意識を伝える資料として重要なミュラーによる「調査指示書」[Инструкция]を紹介することから、当時のミュラーをはじめとする研究者たちが考古学的な遺跡や資料に対して、どのような関心を抱き、分析する視点を持っていたのかを提示していきたい。18世紀当時の彼らの視点を明らかにすることは、ミュラーたちの下から育つ次世代の研究者、また後のロシア考古学の独自性の解明する上でも大いに参考となるものであると考える。

2. ミュラーによるロシアで最初の『考古学調査手引書』

ここまでに翻訳し、紹介するのはミュラーが教え子の大学院生であったフィッシャー（И. Э. Фишер）に宛てて書いた「考古学調査手引書」である。指示書は、100項目からなり、その中身は、埋葬施設の型式分類やクルガンに関する入念な観察、クルガン以外の考古学遺跡である土城（ガラディシェ）や岩壁画、また遺跡から出土する石器、土器にも関心を払う必要性を述べたものである。興味深いのは、すでに埋葬された遺体の方位や副葬品の位置についても注意を払っている点である。

このミュラーの指示書の学史的意義は、この書が考古学研究を行う際の注意事項を記したロシアで最初のものだという点にある。本来、自らの弟子のフィッシャーに宛てた指示書であったが、不幸にもこの手引書はフィッシャーのもとへは直接届かなかった。ドイツ語で書かれたこの手引書は、長くモスクワの科学アカデミーの文書館の中で眠り、1894年にラドロフ（В. В. Радлов）によって発見された。ラドロフはこれを「シベリアの古代」[Сибирские древности]の中でロシア語に翻訳し紹介している（В. В. Радлов 1894）。その内容は以下の「ミュラーの指示書」を参照いただきたい。

この「手引書」からは、ミュラーが極めて細かく遺跡からの出土品の種類や出土状況に対して、入念な観察を行っていたかが窺い知れる。また遺構の特徴を外見、内部構造に分けて分類する必要性を主張しており、当時としては極めてレベルの高い観察を行っていることが判る。後に見るようにこのようなシベリアでの学術探検によって得られた知見がいかに次の世代へと伝えられたのか、このような視点をもった外国人研究者がどのようにロシア人考古学者を育成していくのかという点は、ロシア考古学の成立期を考える上で興味深い点である。

[ミューラーによる『考古学調査手引書』(1740年作成)]

[Инструкция Г. Ф. Миллера 1740]

(Радлов В. В. 1894 *Сибирские древности*, «Материалы по археологии России» вып. 15, с. 107-114 より)

- 1) この地域の古代研究に際して最も重要な目的は、もちろん、その住民の古代史を明らかにすることに努めることであり、できうる限り思い切ってシベリアで眼にする様々な古代を予測することにある。しかし、これと共に、これと関係する他のもの、役に立たない資料や奇妙なもの、叙述を行い、もちろん運べるものは収集し、クンストカーメラに保管し、注意を払うべきものはすべて図に写すことになっている。
- 2) 古代には同じものではなく、研究と同様で、異なっているが故、その入念な研究と記述にはより詳細な指導が必要とされるべきである。
- 3) 彼の地、特にステップでは、古い防塞や土塁を廻らせたものを目にする。それらのあるものは四角形であり、別のものは円形を呈し、いくつかのものは自然の高まりを防御に利用しており形状は円弧に区分できる。このような古代の施設すべてを今日の言語集団は、自らの先祖が構築したと理解しながらず、彼ら以前にこの地に住んでいた集団が残したものと伝えており、残されているシベリアの古代大部分も同様の状態にある。
- 4) これらの防御施設には、次のような注意を払うべきである。重要なのはその自然の中での位置づけであり、その空間的に占める面積、土塁の高さ、堀の深さ、陽の射す方向、出入り口の設けられた位置である。
- 5) この他、ある種偶然ではあるが、全くこの種の防御施設に出くわさなかった中国側のアルグン川の対岸のとある場所で確認したものは重要である。そこでは稜堡状のものが見られた。防御施設のすべての面に個別に出入り口が設けられ、そこには円弧状の堡塁（訳者註：馬面）が設けられていた。突出した部分には真中には様々な彫像（？）が置かれていた。大きな銃眼の中にはさらに小さな小口が設けられ、また井戸のような痕跡も見られる、溝状のものは、かつての使用状況を知るすべがない。
- 6) 別種の防御施設はイルティシュ川流域に見られる。しかし、それらは先のものと同じ時期のものではなく、シベリアの戦乱期に生きたタタールのクチュム汗の施設である。また別のものは、彼の支配下の者によるものである。
- 7) オビ川とイルティシュ川の流域には、数多くの川が注ぎ、オスチャーク族やヴォグール族では、数多くの高地に同様の防御施設があり、それらは最初に構築されたものではないであろう。タタールとサモエードが襲来した時代に敗走した彼ら以前の民族の構築したものである。
- 8) さらに古代の初期には部類に位置づけられないものに施設の廃墟があり、イルティシュ川流域ではサミ・パラトやアプライキタという名称で知られている。これらの建物の施設の遺跡は風化していない。カルムィキヤやモンゴルのステップではさらに多くのこのような施設があり、その内の一つは最近に建てられたものである。
- 9) オビ川流域で得られた私の知識ではバシュキールの国境において古い半壊した建物が見られる。それをどの年代に位置づけることができるのか私には判らない。私の調査旅行ではそこを訪問することはできず、その信頼性を語ることはできない。
- 10) この種の建物と先の分類にした防御施設は、比較的新しい古代に位置づけられるであろう。し

- かし、それらを記載する価値があることには疑問の余地がない。仮にその起源を知ることができれば、それはシベリア史の研究に役立つであろう。
- 11) それゆえ崩壊したサミ・パラトやアブライキタで発見した古文書にもエニセイ川の洞窟や国境の対岸と等しく関心を払うべきである。
 - 12) ネルチンスク・ステップには、モンゴルからアルグンを通してアムールへ真っ直ぐ伸びると言われる土塁がある。
 - 13) ステップの背後の、クラスノヤルスク管区では、人や動物の姿を描いた石像に出会う。それらは、今日そこに生活する言語集団の崇拝の対象となっている。ストラレンバーク²⁾の論文に描かれている石製の羊はこの種のものに加えることができる。これらはすべて私によって報告され、記載され、描かれたものである。仮にさらにいくつか見られるならば、それらの顔が南を向いているかどうかを証明する必要がある。
 - 14) 現在のクラスノヤルスク、エニセイ川より西の塩湖に面してかつて立っていたこの種の石像には、背面に未解読の碑文が残されている。
 - 15) セミ・パラトと呼ばれる地には破壊された人面をもつ大きな石像があり、この脇で発見された墓では17人の金の採掘人が発見されたという。
 - 16) ストラレンバークの石像は、彼の言葉に従えば、アバカン近くの、チェシ川とエルボイ川との間に位置し、装身具も描かれているという。それを探し出して存在を証明することには価値がある。なぜならば私はその石像をその場所に見つけることができず、いかなる情報も得ることができなかったからである。
 - 17) この他にもエニセイ川の西側には、大規模な垂直に立つ石の記念物があり、その大部分は磨かれており、装飾を描いたものは数少なく、描かれた線刻におそらく一定の意味があると思われる、知られる限りある種の文字が描かれている。
 - 18) 次は、メッサーシュミットが描き、バイエルとストラレンバークが出版した図版にあるウイバト川に面する石についてである。私はこれを新たに描くことを命じた。驚いたことに上述したクラスノヤルスクの石像に刻まれた文字とこの石の記念碑の文字とは同じものであった。このような碑文を更にいくつか見つけることができれば、時期や失われた文字を解読できるかもしれない。
 - 19) 図像がなくとも、文字が描かれていなくとも、古代の遺物を軽視すべきではない。重要性が低いものはなく、それらを複写することは必要であり、時代とともにこの種のものがすべての古代を構成し、それらから結論が導かれるかもしれない。
 - 20) これにトムスクとクズネツクの間を流れるトミ川流域や、クラスノヤルスクより下流のエニセイ川、ムルクス急流より上流のツングースカ川、ヴェルホレンスクとトゥトゥールスクの間のレナ川流域の自然の岩肌に描かれた人や動物を描いたものも含まれる。
 - 21) ジーダ川とケムニク川との間のステップに位置するセレンガ州にも岩肌や石に様々な図像が描かれていると聞き及んでいるが、私はその状況を知りえないし、我々の同行者の中で誰もその現地を訪れてはいない。
 - 22) イルビチ川とピシュム川に接した岩肌に赤色顔料で描かれた図像については、ストラレンバーク

2) メッサーシュミットの探検隊に参加していたスウェーデン人捕虜であったストラレンバークである。彼は帰国後旅行記を残している。Strahlenberg Ph. J. Das Nord- und Ostliche Theil von Europa und Asia. Stockholm, 1730.

クに聞くことができよう。

- 23) 彼に言葉によれば、イルティシュ川とイシム川との間にあるイチツク山には、文字を刻んだピラミッドがあるという。もし可能ならば、私自身、これらすべての場所を実見したいが、仮に私が可能であるとしても、それらに注意を向けるように勧める。
- 24) イスブランは、アルグン川近くで見つけた古い石臼と荷馬車の車輪について書き記している。この報告を裏付ける事実を得たにも関わらず、誰もこれを見つけることができない。誰かこれらの遺物を記載することができるであろうか。様々な民族の現在の資料とともに古い資料を比較するためにこの形態を確認することが必要である。
- 25) クラスノヤルスク・ステップにおいて私は2点の古く大きくはない石臼を発見し、それらが残されている証拠を見つけた。私は、同じステップから、ペーリィ・ユース近くのトユム川で、木に立て掛けられている大きな石臼を2つ報告した。
- 26) シベリアにおける銅や銀の鉱床であるウラル山地、サヤン山地、ネルチンスク山地、アルグン山地ではどこでも、古代の堅抗や鉱床のみではなく、古代の滞在者が鉱石を溶かし、精錬した精錬用の炉の痕跡が見られる。
- 27) イルティシュや、クラスノヤルスク、ネルチンスクのステップにある古代の墓は、古代史やその地域の住民の生業を解明するなによりの資料を提供してくれるであろう。仮に品々や道具、価値あるものをそこから引き出せれば、無駄になるものはない。現在、それらを観察できるものは唯一つに過ぎない。記憶されているように、そこより見つかる数多くの高価な品々や珍しい品々のために埋葬地の多くは破壊されている。
- 28) 仮にシベリア南部、トボリ川上流やイルティシュ川の西側に行く際には、そこはほとんど発掘されておらず、あらゆる危険とキルギス人とカイサク人の敵対的侵入によって限定的な成果のみであり、さらに多くの発見があるであろう。非常に期待されるが、再びかくも多くのすばらしい歴史的遺跡の重要な宝物が失われてしまわないために入念に監視すべきである。
- 29) さまざまな場所に位置する墓の外見は異なっている。同じ場所においてさえも、墓はそれぞれ異なっている。それらは全く異なる集団によると見なすことができる。
- 30) イルティシュ川において私は、墓には土や砂を堆積させて築いたものや、また小石で覆われたもの、いくつかの石で築いた輪を廻らせたものや、他に全体を石で覆われたものがあることに気づいた。
- 31) いくつかの墓には、四隅に四角く薄い板石が、約1アルシン³⁾の高さをもち、にも関わらず稀にすべての面に同じ間隔で同じ数だけ立てられたものがある。いくつかの事例では垂直に立てられた板石が、人の背を越えて、墓の東側に単独で立てられている。
- 32) 私は、発掘された墓を目にしたが、その内部にはアーチ状に日干し煉瓦を並べられていた。聞き取りで私は同様の類似した半地下式の墓で焼煉瓦や丸石で作られたアーチをもつ墓が見られることを知った。
- 33) ヴェルフニィ・クラスノヤルスク・ステップの、エニセイ川両岸、より西側に無数のこの種の古代の墓があり、より多くの違いが目飛び込んでくる。
- 34) 一つめの種類の墓は、大小の円形の墳丘で構成され、四角形の大きな、垂直に立てられた石を廻らしている。ロシア語ではそれらを「土のクルガン」と呼んでいる。

3) 1アルシン：ロシアの古い単位で1アルシンは約71 cm。

- 35) 二つめの種類の墓は、同じ高さに土の上に石を覆うか、積み上げたもので、同様に四角形の大きな石を廻らしたもので、「石のクルガン」ないしは「石の標識」と呼ばれている。
- 36) 三つめの種類の墓は、土の表面をロシア語ではブリートと呼ぶ、粘板岩を打ち割った平たい小型の石で覆う。ときおりそれには垂直に立てられた石が廻らされている。この種の墓は、その覆われ方から「スレート (のクルガン)」と呼ばれる。
- 37) 四つめの種類の墓は、同様に類似した低い石を廻らせたもので、先にあげたものと同様に「ブリート」で覆っているが、土の表面を覆っているものはわずかであり、それぞれが密に立てられた四面の壁を形作っており、このような墓は「坑型 (のクルガン)」と呼ばれる。
- 38) 実際に、クラスノヤルスク・ステップにはさらにもう一種類の墓があり、それは「キルギスの (クルガン)」と呼ばれる。しかしそれは古い墓と混同するべきではない。なぜならそれらを作った集団や、まだ最近の遺跡であることが明らかであり、墓からそれを (生業を調べるための) 参考資料はなにも得られない。
- 39) 垂直に立てられた石、クラスノヤルスク・ステップの最初の三つの種類の墓に廻らされたものは、時折驚くべき大きさで、ステップに住むいかなる集団がつくったのか理解ができない。同じような石を引きはがし、運び、構築した技術的な装置について何も明らかにではない。
- 40) これらの石は等しく薄い面が常に方向を意識しており、イルティシュにおいて石はすべて平坦な側面を墓に向けている。
- 41) クラスノヤルスク・ステップのいくつかのクルガンには、通常の墓石以外に、石を前面に立てて四方に配置したのものがある。それについていかなる意味をもつものか言及できない。
- 42) それと同様に、先に指摘した墓の石には時折、稀ではあるが、先に指摘した石の記念碑と同様の図像や線刻が描かれている。唯一ひとつのものに私は人の顔が描かれているのを見つけた。
- 43) 50 基で構成されるクルガンのひとつは (アバカンとウイバータ川の間のステップに位置する)、私が計測した大きさでは裾野の周囲が 350 歩を測り (これは私が見て、また他の者の目からも最大のクルガンである)、同様に石に絵が描かれていることに気づいたが、私の調査旅行ではその絵を複写することができなかった。故に機会が得られ次第に図化することは有益である。
- 44) ストラレンバークは三角形の墓について述べているが、私はそれを見てはおらず、そのようなものが存在していたことも聞いたことがない。故にそれについて、別の情報もさらに集めるべきである、彼は墓について報告しており、私の報告と同様に、それについての情報の事実確認を強く求める。
- 45) ネルチンスク・ステップの墓は、クラスノヤルスク・ステップの第一のカテゴリーの墓と類似しており、唯一の差異は大きな垂直に立った石が大半互いに接して立てられている点にあり、イルティシュでの墓を想起させない。
- 46) そこでは稀に石を積み上げて覆った墓を目にするが、私もこの種のアルギンスクの銀鉱床にある一事例を報告した、そこでは同様の墓が鉱石を探し出す際に破壊されていた。
- 47) 光の方角との関係において墓とその周囲に四角形に配置された石の位置、それら四角形の長さ、と幅、クルガンの大きさと高さ、石の大きさや幅と厚さ、すべての状況に注意が向けられたが、特に墓の外見に関しては、知られている地域の大半で、通常同じ形状を示している。
- 48) 墓石として立てられた大きな石については、岩山や近くに同じものが存在しないかどうか、そこから石を採取できるかどうか、運ばれてきていないか、または遠くから持ち込んでいないかを同様に注意を向け観察すべきである。

- 49) 墓に含まれるものを正確に判定する可能性を得るため、なによりも、特に骨以外の珍しいものが葬られているものが見つかる場所では様々な場所で多くの墓を発掘するように命じよ。
- 50) このために集落で、十分な数の人足を雇い、作業をするための道具、つまりスコップやつるはしを準備する必要がある。なぜならステップのこのような墓は大半がロシアの村から遠く離れて位置しているのだから。
- 51) 仮のそこで（発掘区で）時間がないことが判明し、機会もない場合、非常手段として、昔話を語る人々からをあらゆることを熱心に記録し、墓を長期間発掘する食料を自ら見つけることが必要である。
- 52) トボル川上流の、イシム川沿いの村やタラ、イルティシュ川沿いの防御施設、デミードフのコリヴァンスク工場、オビ川流域村の大半、同様にトムスクやクズネツクの周辺、もちろんアバカンスク、クラスノヤルスク・ステップでも、住民はこれについての最も良質の詳細な情報を提供してくれる。
- 53) 墓を個人で調査し、それらについて尋ねる際に、注意を払うべき状況としては次の項目が挙げられる。
- 54) 墓にいか所またはいくつかの場所に埋葬が見つかったかどうか。
- 55) 墓には墓石の特徴も見られたかどうか。
- 56) 被葬者を埋葬した場所に石を配置していたか、どのような状態で、どのような石を、廻していたのか、プリート（板石）で覆われていたのか、単に地面に掘られたものであったのか。
- 57) 墓の上の土は密であったか突き固められていたか、または単に埋めただけか。
- 58) 地面からどれほど深くに墓を設けていたのか、構築されたクルガンの場合、地表面からの計測をクルガンの大きさから差し引くべきかどうか。
- 59) 棺の跡があるか見られるかどうか、被葬者は板に置かれていたのか、それとも丸太の上に置かれていたか、何かで覆われていたか、または何かに包まれていたかどうか。
- 60) 被葬者は完全に埋葬されていた特徴があるかどうか、密に配置した複数遺体の埋葬を推定できないかどうか、被葬者は最初に火葬にされ後に骨だけ埋葬されたか否か。
- 61) 火葬された被葬者の骨は土器に収めてられて見つかったのか、それとも単に地面におかれて見つかったのか。
- 62) 火葬されていない被葬者では頭はどの方位を示しているか。
- 63) 骨はすべて自然の状態で位置しているか、常にすべての骨が一人分の遺体か時に幾人かの遺体が含まれていないかどうか。
- 64) 骨はどのくらい時代が経過しているか、劣化しているか、それはどのような色か。
- 65) 被葬者に伴ってウマやヒツジの完全骨格やその一部、最低でもその頭部が埋葬されているかどうか、それはどこにどのような状態で埋葬されているのか。
- 66) 埋葬の場合と火葬の場合で、どのような品や道具そしてどのような金属が墓に見られるか。
- 67) それらの品々は頭に置かれているか足本に置かれているのか、通常どちらの脇に置かれているのか。
- 68) イルティシュ・ステップでは、時折、数多くの小型の金製の円盤の装身具が被葬者に見られる、おそらく覆いに装着されていた。
- 69) 最も通常の副葬品は、高価な金属で作られた、例えば金製の、耳飾り、扁平の指輪、首や腕につける環飾、ベルトである。

- 70) 同様になにかしらの飾りの宝石や玉類も見られる。
- 71) 火葬骨に伴って見つかる金や銀はどのような様相で見つかるのか；それらは合金のかけらで構成されているのか、またはそれらは、少なくとも、軽く溶かされているのか、同様に非合金のものが見られるかどうか。
- 72) 墓からは、人や動物の様々な様態を表現した金や銀で鑄造された品々、また黄色や赤色の銅製品が多く見られる。
- 73) 比較的、図像や記名をもつ金属製のバックルが多く、イルティシュの墓ではかなり頻繁に見られる、墓から一点のみか、いくつかのバックルが見つかったのか、それらを衣服の革ベルトに固定した跡が残されているかどうかを調べる必要がある。
- 74) それら共にクラスノヤルスク・ステップの墓では、図像や記名を持たない円形で小型の赤色銅製のバックルが見られる。
- 75) 先の出土品に宝石や金製や銀製の硬貨が見られないかどうか。私はこれまで文字のようなものを見つけたことがない。
- 76) サーベルや短剣、闊斧、ナイフや矢のような副葬品に武器は見られるかどうか、それらはどのような金属で作られているのか。特にクラスノヤルスク・ステップでは、すべてこの土地の武具類は銅製であると言える。
- 77) 食器として、鍋、壺、碗、皿、燭台などは見られるか。それらはどのような金属でつくられているのか。
- 78) 金箔の銀製食器は見られるか。
- 79) 駒ゲームは見られるかどうか。
- 80) 土製の壺や水差しが見られるか、それはどのような形状か。それらに取手は作りつけられているか、また釉薬はかけられているか。
- 81) 金属製や土器、碗に深い刻みや、人や動物、植物の浮彫は見られるかどうか。
- 82) どこかで完形の容器や陶器製の碗が見られたかどうか。
- 83) 時に絹や毛製の布の切れ端、特にビロードや同じく鞍褥や馬勒の革が見られるか。
- 84) イルティシュの墓では、しばしば鞍褥や馬勒、他の馬具に銀製の装飾がつけられる。
- 85) クラスノヤルスク・ステップの墓には鉄製の鐙や轡が見られる；これはこの地方で見られる唯一の鉄製品である。
- 86) 先に見た、鉱石を採掘する際に掘り返された、アルギンスク銀鉱床の墓には、鑄造された金属製の美しい上部に取手をもつ大型の分銅型の製品が見つかった；それには明瞭に文字が刻まれており、中国語や満州語を知る者ならば解読できるかもしれない。
- 87) しばしば墓石の外側に副葬品が見つかるかどうか、それはどのようなものか。
- 88) 墓を発掘した者がいるかどうか、彼らに知られている周知の副葬品は何か、墓には希少な物が含まれているか、それらの品々は何か。現在まで未だ発掘されていない墓には、特にすべてのネルチンスク州のものは全くこのような品々が副葬されていないため、誰も発掘しないと信じられてきた。
- 89) 森林よりに位置する墓は常に、最も副葬品が乏しく、一方遠くステップに位置するものは最も希少なものが数多く副葬される傾向が認められるかどうか。
- 90) 時折、墓の外の土中に古代の金属製品や石製品が見られる、それらを別に注目する必要がある。
- 91) これには古代の闊斧や雷の矢と呼ばれるものが含まれ、もちろんメノウや碧玉製の石鐙や石槍

- も含まれる。最近このような品々がレナ川河岸のキーリンスク砦やステップのクラスノヤルスクにおいて大地を掘り返したところで見つかっている。
- 92) 最近、エニセイスク近くで、細長く薄手の楕円形を呈し、尖った両端をもつ石が見つかっている；その片側には小型のつまみがあり、反対側には中心から等間隔で二か所のつまみがあり、それらの先端は尖っていない。
- 93) ペルミ州では時折、クファー書体のアラビア文字をもつ古代の硬貨が見つかる；しかし隣接した地域（シベリアから）これが持ち込まれことを考慮すべきである。
- 94) オビ川流域のオスチャーク族には、かつて金属製の偶像が存在した、それは明らかに昔に彼らのところに別の地域から、おそらくペルミ州より持ち込まれたものである。
- 95) 金属製の偶像がマンガゼーヤ州のサモエド族の地で見つかったというが、どこにあるかを知らないが、同じ起源のものかもしれない。
- 96) サモエドの偶像である「ユネッタ」はロシア語で「パルバン」（「ボルバン」）と呼ばれる、つまりケンタウロスは、このような古代の品の一つであることは疑いない。
- 97) タズィ川のユラク・サモエドは、レドフ海やタズィ湾から最も北に位置するが、美しい装飾の銀製の容器を持つという；私はまだそれが確実に古代のものであると信じ難い；彼らがロシア人から入手した可能性があり、タズィ川沿いにマンガズィヤの町がまだ存在した時期や、その当時にタズィ湾沿い航行した際に、そこに捨て去られ、忘れ去られたものであるかもしれない。
- 98) モンゴル族には、バイカル湖のオリホン島の山の上に五徳と大きな釜があり、そこはまるで鹿の頭の様であるとう伝説がある。彼らの言によれば、それらはチングス・ハンのものであるという。イルクーツク州で私は幾度となくこれについて尋ねたが、この話を裏付けるものを誰からも得られなかった。仮に実際何かしらこの種ものが判明したならば、できうる限り確認する必要がある。
- 99) いくらかでも可能であれば、入念に収集し、購入し、すべての古代の品々をコンストカーメラへ送り、参加者はどこにおいても、いかなる金属製品ないしは石製品に限らずこれらの品々を探し出すべきであり、もちろん土器にも関心を持たねばならない。
- 100) 同様に隣接する国々の情報、どのような古代が存在するのかという情報を集めることも必要である；このような情報は聞き取りし、得られる品々は同様に帝室コンストカーメラ用に収集し、購入する必要がある。

このようにミューラーの「手引書」からは、当時のシベリア探検においてクルガンを始めとする遺跡な出土品に強い関心が向けられていたことが窺える。調査に際しての注意点、観察すべき点などを細かく指示しており、そこよりミューラー自身が資料のもつ情報量や出土状況や遺跡周辺の環境との関わりが資料を考える上で重要であることを十分に認識していたことが窺える。この時代の学術調査には、学生がしばしば同行していた。また収集された資料は、ミューラーの指示書にもあるようにコンストカーメラに収蔵されている。それらが積極的に調査研究されたことは明らかである。以下においては、ミューラー達、海外から招へいされた研究者である、ロシア考古学の第一世代の特質と彼らによる次世代の育成について見ていきたい。

3. ロシアにおける考古学の第一世代の特質

既に述べたようにロシアにおける近代科学の開始は、18世紀前半のピョートル大帝の治世下に求めることができる。1700年から1721年まで継続したスウェーデン王国との間で行われた大北方戦争(二十年戦争)の最中、ピョートル大帝は1703年に新たに獲得したフィンランド湾岸に首都を建設し、「聖ペテロの町」、サンクト・ペテルブルクと名付けた。人工都市であるペテルブルクには、新たな首都としての整備が進められる一方で、様々な学術教育機関も設置された。ピョートル大帝が教育組織の整備の一環として設置した学術機関の中で、後の考古学の発達に大きく寄与したものとしては、ロシアで最初の博物館施設となったクンストカーメラ(現ロシア科学アカデミー人類学・民族学博物館)と帝室サンクト科学アカデミーおよび大学(Академический университет:後のサンクト・ペテルブルク大学)がある。

1718年に創設されたクンストカーメラの初期のコレクションの中には、1716年にシベリア総督ガーリン卿がシベリアからペテルブルクへ移送したクルガン(古墳)から出土した黄金製品も含まれていた。80点以上と推定されるこれらの資料は、ピョートルのシベリアコレクションの中核となり、現在ではエルミタージュ美術館に収蔵されている。

1724年、ロシアが科学技術や芸術の領域において西欧の水準に追いつくための組織作りとして学術研究・教育機関の創設が計画される。これが科学アカデミーと大学の創設である。設置のための元老院布告は1724年に出されたが、実際に発足したのはピョートルの死後の1725年であった。このアカデミーの機能としては、学術的研究のみではなく、高等教育機関としての機能を果たすことが求められていた。そのため設置されたアカデミーにはアカデミー大学とギムナジウムが付設されたのである。

帝室サンクト・ペテルブルク科学アカデミーには、人文科学領域のクラスとして3つの講座が設置されていた。講座の内のひとつは「古典学と古代学」講座、二つ目は「古代史と現代史」講座、三つ目は「政策と倫理に関する商法」講座であった。一方で大学には哲学部が設置され、そこでは古典学と古代学、歴史が講じられた(Князев 1945)。

開設当初のアカデミー会員の多くは、ドイツから招聘された研究者であり、古代史や古典学に関する研究者としては、古代史のヴュルガー(M. Bürger)、古典学ではバイヤー(G. Z. Baeyer)がおり、それぞれ古代史や古代ギリシャについて講じている(Формозов 1974; Фролов 1996)。このような新たな首都を取り巻く状況の中で、シベリアへの学術探検隊も派遣されたのである。そして、これらの学術探検隊を率いたのも招へいされた外国人研究者達であった。正にロシアにおける近代科学の導入と人材の育成は、外国人研究者によって礎が築かれたと言える。

このようなドイツなどから招へいされた研究者の中で考古学と関わる者としては、代表的な研究者の一人に1720年から1727年までの最初の組織的な学術探検隊を率いたメッサーシュミットがいる。メッサーシュミットは、ダンツィヒ(現ポーランド、グダニスク)生まれのドイツ人でイェナ大学とゲラ大学で医学を学んでいる。1716年にロシアへ招へいされ、1718年11月5日ピョートル大帝による勅令により「草、草花、草根、種子そのほか薬用に用いることができるものの調査」を命ぜられた(Новлянская 1970)。

この勅令に従い行われたのが足かけ7年間におよぶシベリア調査である。調査は、イルティシュ、オビ、エニセイ、ポドカーメンナヤ・ツングースカ、レナの各河川、バイカル湖に及んだ。5巻に

およぶ日誌には、シベリアの動物化石、鳥類、魚類、昆虫、植物、シベリアの諸民族、その生活様式が記録されている。この探検において採集された貴重な記録資料は、後に科学アカデミーとクンストカーメラに收藏された⁴⁾。

このメッサーシュミットによるシベリア探検は、先に述べたように薬用植物などの採集調査が目的であったが、併せて地理学的、民族誌学的、考古学的調査も行われている。アバカンの近郊では、クルガンの発掘を行い、金製品や銀製品が出土することを報じている。クルガンの発掘においては地層の堆積状況の記述もあり、当時としては優れた考古学調査であったといえる。

4. ロシア考古学成立期におけるミュラーの位置づけ

先に紹介したロシアで最初の「考古学調査手引書」を残したミュラーも、メッサーシュミット同様にドイツから招へいされた研究者であった。しかしながら、ミュラーの評価は、シベリアでの学術探検の評価に留めるべきではない。彼のその後のロシアの学界において果たした役割も含めて、その位置づけを正しく評価するべきである。

ミュラーは、1705年にウエストファリアのギムナジウムの校長の息子として生まれ、ライプツッツ大学において言語学、歴史学、地理学、民族誌学を学んでいる。1725年に学士を取得したミュラーは、ペテルブルクへ渡り科学アカデミーに勤務した。当初ミュラーの科学アカデミーにおける身分は、学生であったが、後に助手となっている。1726年にはアカデミーのギムナジウムにおいてラテン語、歴史、民族誌学を講じるようになった(Тихонов 2003)。

1728年から1730年にかけてミュラーは、アカデミーが発行したロシアで最初の新聞[Санкт-Петербургские ведомости]の編集長を務めている。1730年には正式に教授およびアカデミー会員となり、大学において講義も担当するようになった(Тихонов 2003)。

1733年、第2回カムチャツカ探検隊に参加し(ミュラー自身はカムチャツカには到っていない)、西シベリアと東シベリアの調査を行う。10年にもおよぶこの調査はミュラーの研究者人生に大きな影響を与えたといえる。彼の歴史家としての評価はこの調査によって得られたという評価もある(Тихонов 2003: 13)。このシベリア学術探検においてミュラーが集めた資料は膨大であり、そこにはエカテリンプルクからヤクーツクにいたる広大な領域の地理学、歴史学、民族誌学、シベリアの経済に関する資料が含まれていた。この収集された資料は、アカデミーの古文書館に保管され、後に「ミュラーのカバン」と称された⁵⁾(Голицин 1899)。

このミュラーのシベリア学術探検における考古学調査の成果については、先に見た大学院生であったフィッシャーへの「手引書」から窺うことができる。この総合的な学術探検からは、多くの著作が生み出された。クラシェニンニコフは『カムチャツカの大地の記録』[Описании земли Камчатки]を著し、グメリンは『シベリア旅行記』[Путешествие по Сибири]と『シベリアの植

4) Strahlenberg Ph. J. Das Nord- und Ostliche Theil von Europa und Asia. Stockholm, 1730.

5) ミュラーとともに探検に参加したアカデミーのメンバーには天文学者のクロイネル(Д. Д. Л. Кройер)、自然科学者グメリン(И. Г. Гмелин)、学生であったクラシェニンニコフ(С. Крашенинников)、ゴルラノフ(А. Горланов) ポポフ(Ф. Попов)などがある。中でもクラシェニンニコフ(С. И. Крашенинников 1713-1755)はカムチャツカへの旅行を選択し、彼の旅行記録は[Описание земли Камчатки]としてまとめられた。これは最初のロシアにおける民族誌であり、そこには北東アジアの先住民族の原始文化、生活習慣、石器に関する記載が含まれている。

物相』[Флоре Сибири]、そしてミュラーは『シベリア史』[История Сибири]をまとめている⁶⁾。

探検よりもどったミュラーの仕事は採集したこれらの膨大な資料の整理であった。彼は、新たな地図を作成し、彼の最も大きな仕事である『シベリア史』の執筆に従事する。

ミュラーの功績が、このようなシベリアにおける学術探検とその成果に留まるのであれば、メッサーシュミットと同様の位置づけとなろう。しかしミュラーは、シベリアにおける学術探検以降の活動においてもロシア考古学の成立期に大きな役割を果たしている。

ミュラーの位置づけが重要である理由は、彼がアカデミーの研究者であるとともに、大学における教育者としての側面を持っていたことにある。既にシベリアへの学術探検に出発する以前の1730年にミュラーは、正式に帝立サンクト・ペテルブルクアカデミーの会員となり、教授として大学において講義を担当していた[Тихонов 2003]。1743年にシベリアから戻るとまた研究と教育に復帰している。

大きな転機を迎えるのは、それから4年後の1747年であった。ミュラーは、この年、初代サンクト・ペテルブルク大学の学長となる。学長となったミュラーは、サンクト・ペテルブルク大学をヨーロッパの大学と同様のものとするべく力を注ぐ。とりわけ歴史に関わる講義の充実に力を注いでおり、1750年には自ら古代ルーシ史の講義を行っている。また1746年にはアカデミーにロシア史の資料を収集する部門を設置しており、1749年には「ロシアの民族と部族の始まりについて」という講義を行い、ロシア民族の起源を体系的に研究する先鞭をつけている。これらミュラーの行った取り組みは、ロシアにおけるロシア史研究の基盤形成として極めて注目できるものである。設立当初のアカデミーにおける部門や、大学における科目が古典学やギリシャ・ローマを中心とした古代史であったことを考えると、自らの歴史に目を向けさせたという点においてロシア古代史や後の考古学の形成に及ぼした影響は少なくないと評価できよう。

このようなミュラーの取り組みの中から輩出した次世代の研究者には、バイエル(Г. З. Байер)などがおり、彼はやがてこの問題を「ノルマン理論」として発展させ、ロモノーソフ(М. В. Ломоносов)との間に激しい議論を行うこととなる(Формозов 1995)。

ミュラーは1750年に学長のポストを教え子のクラシュニンニコフに譲り、さらに8年後にはロモノーソフが学長のポストに就いている。ミュラーの指導の下でのサンクト・ペテルブルク大学は、その後の他のロシアの大学組織の形成に大きな影響を及ぼした。1755年に設立されたモスクワ大学の初期の教授陣の多くがサンクト・ペテルブルク大学から輩出されたことから、その与えた影響の大きさを知ることができよう。このようにして見るとミュラーの功績とは、シベリアにおける学術探検や『シベリア史』のみならず、次世代を育成する教育組織の整備と、ロシアにおける独自の古代史研究の先鞭をつけたという点で評価すべきと考える。

1754年以降、ミュラーは、11年間にわたりアカデミー会議書記を務め、1755年からはアカデミーが刊行した最初のロシアの学術一般雑誌である『月報』[Ежемесячные сочинения]の編集長となり、そこに自らも多くの論文を寄せている。1756年にはミュラーはモスクワへ移動し、更に外交部国立文書館の館長となっている。

6) ミュラーの著作はソ連時代の1937年になって初めて出版された。

5. ミューラー以後

ミューラーの『手引書』の果たした役割であるが、これについて別に興味深い指摘がなされている。1768年から1774年に再びアカデミーは北部ロシアと南ロシアへ大規模な探検隊を派遣する。調査対象地は、ウラル、ヴォルガ流域、シベリアであった。その中でパラス（П. С. Паллас）の率いる探検隊は、東ロシアとシベリアを調査している。この時にパラスはシベリアにおいて多くの墳墓を発掘しているが、ペロコビンスキー（Ю. Г. Белокобынский）は、パラスが調査に際して1740年にミューラーが作成した『手引書』を用いている可能性を指摘している（Ю. Г. Белокобынский 1982）。

パラスの探検隊には学生として後に北極圏のサモエドに関する詳細な民族誌を残すズーエフ（В. Зуев）が若干16歳で参加していた（Вердов 1947）。確かにミューラーによる『手引書』は、サンクト・ペテルブルク大学で養成される学生を通じてその後のシベリア調査に活用されていた可能性が高い。しかしながら、フィッシャー宛に送られ、長くモスクワの科学アカデミーの文書館の中で眠り、1894年にラドロフ（В. В. Радлов）によって発見されるまで公式には活字化されなかったミューラーの「指示書」がどのようにしてパラスに渡ったのかについては、より検証すべきである。パラスによる調査にミューラーによる「指示書」と重複する観察点が存在したことを、ミューラーの「指示書」に従った結果と見るか、また当時の18世紀のアカデミーの調査においてすでにそのような観察点が共有されていたと見るかは、更に資料的検討を要するであろう。いずれにせよミューラーの播いたロシアにおける古代史研究の種は、着実に育ちその伝統は次世代へと継承されていたことについては疑う余地はないであろう。

更にドイツからの研究者による次世代の研究者の養成は、ロシアの研究者が継続的にドイツを中心とした地域において留学を通じた基礎的訓練を行うという伝統の導入にも大きな役割を果たした。先にパラスとともにシベリア探検を率いたレベヒン（И. И. Лепехин）のケースを見ると、アカデミーのギムナジウムを終了した後、大学に入学し、ロモノーソフの元で学んでいる。一方でミューラーが『手引書』を渡そうとしたフィッシャーの下でも歴史と古代の講義を受講している。1762年から1767年にかけては、ストラスブール大学で学び、ペテルブルクに戻ってからはアカデミーの大学院生となり、ヴォルガ川の探検隊に参加している（Фрадкин 1950; Лукина 1965）。同様にズーエフも1774年にライデン大学の医学部へ自然科学者として派遣されている。

この当時のドイツにおいては1763年からゲッティンゲン大学でハイネ（Ch. H. Heine）が「古代芸術の考古学」を講じていた。18世紀の前半においては、ヨーロッパにおいて考古学と銘打った講義を開設していたのはゲッティンゲン大学のみであった（Формозов 1975）。このようなドイツとの深い結びつきは、「考古学」という用語のロシア語への導入にも見ることができる。19世紀の初頭になってようやくロシアの学問体系の中に学術用語として「考古学 археология」が導入されるようになる。この用語の起源はドイツの大学において用いられていた[arkhaiologia]が移入されたものであると考えられている。そしてロシアにおいては考古学という用語がドイツから移入されている背景には、18世紀にゲッティンゲン大学をはじめとしてドイツへ派遣されたロシア人学生がおり、現在では彼らを通じての移入が想定されている（Осипов 1996; Формозов 1975）。

確かに18世紀のロシアにおいて考古学は、未だ独立した学問とはなっていなかった。しかしアカデミーによる総合学術調査の中で、考古学遺跡についての情報は、民族誌や地理、自然科学の資料

とともに収集され、歴史の復元のための資料として考古学資料が活用されていった。1758年からアカデミー大学とギムナジウムの学長となったロモノーソフが行ったすべての地方に配布されたアンケートの中では、地理的および経済的情報に加えて、遺跡についての情報の提供が求められている。確実にシベリアへ派遣された学術探検隊が持ち帰った資料と知見は、後のロシア考古学の基礎となっていたと評価できよう。このようにして見たとき、ミュラーのロシア考古学の成立期において果たした役割は、「考古学調査指示書」の作成も含めて、大学における講義体系の整備と次世代の育成として極めて大きなものであったと見なすことができる。

モスクワ大学には、1804年にスラヴ学の組織(学部)が創設され、ロシア国家の地理と世界の地理と歴史を含めた世界史の講座、また美術理論と考古学の講座が設置されている(Бутягин и Салтанов 1957: с. 33)。しかしこのような講座が存在したのはモスクワ大学のみであった。ロシアにおける考古学がより体系的な学問として整備され、学会などが整備されるのは、次の世代の出現を待たねばならない。

参考・引用文献

Белокобынский Ю. Г.

1982 У истоков сибирской археологии, *Археология Северной Азии*. Новосибирск, с. 5-14.

Бутягин А. С. и Салтанов Ю. А.

1957 *Университетское образование в СССР*, Москва.

Вердов Г. Д.

1947 В. Ф. Зуев: *Материалы по этнографии Сибири*, Москва-Ленинград.

Гнучева В. А.

1940 *Материалы для истории экспедиции Академии наук в XVIII и веках*, Москва-Ленинград, с. 44

Голицин Н. В.

1899 *Портофели Миллера*, Москва.

Князев Г. А.

1945 *Краткий очерки истории Академии наук СССР, 1725-1945*, Москва.

Лукина Т. А.

1965 *Иван Иванович Лепехин*, Москва.

Миллер Г. Ф.

1999 *История Сибири*, том I, Восточное литература, РАН, Москва.

2000 *История Сибири*, том II, Восточное литература, РАН, Москва.

2005 *История Сибири*, том III, Восточное литература, РАН, Москва.

Новлянская М. Г.

1970 *Даниил Готтлиб Мессершмидт и его работы по исследованию Сибири*, Наука, Ленинград.

Осипов В. И.

1995 *Петербургская Академия наук и русско-немецкие научные связи в последней трети XVIII века*, СПб.

Радлов В. В.

1894 *Сибирские древности, Материалы по Археологии России, вып. 15*.

Формозов А. А.

- 1974 Археология в Академии наук, *Совеская Археология* № 2, с. 6
Формозов А. А.
- 1986 *Страницы истории русской археологии*, Москва.
Формозов А. А.
- 1975 История термина «археология», *Вопросы истории*, № 8, с. 215.
Формозов А. А.
- 1995 *Русские археологи до и после революции*, Москва.
Фрадкни Н. Г.
- 1950 *Академик И. И. Лепехин и его путешествия по России в 1768–1773 гг.*, Москва.
Фролов Э. Д.
- 1996 *Г. З. Байер и начало антиковедения в России, Готлиб Зигфрид Байер — академик Петербургской Академии наук*, СПб., с. 17.

Historical Formation of the Russian Archaeology (1): G. F. Müller and his archaeological instruction

Hirofumi KATO

Graduate school of Letters, Hokkaido University

This paper investigates to trace the early period of the history of Russian Archaeology, through Müller's "Archaeological Instruction" which written in 1740. His instruction is the oldest archaeological instruction in Russia. And in this paper briefly outlines the historical formation of Russian archaeology, discusses the role of German scholars and the Academic expedition in Siberia.